

「深い人間的な学び」を創造する伝記教材の授業 —「杉原千畝」(開発教材)と向き合う小学6年生—

佐藤 洋一* 左近 妙子**

*教職実践講座

**愛知県名古屋市長平和小学校

A Class which Creates Profound and Human Learning with Using Biographies —6th Grade Elementary School Students Undertake “Chiune Sugihara” (Original Teaching Material)—

Yoichi SATO* and Taeko SAKON**

*Department of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Heiwa elementary school, Nagoya 460-0021, Japan

1、次期学習指導要領と「創造性・深い学び」

(1) 「深い学び」「主体的な学び」の実現と実践課題

「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」(2016年8月26日中教審教育課程部会)では、『深い学び』の実現に向けて(略)、子供自身が「略創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要」とされている。

さらに『主体的な学び』の実現に向けて(略)、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなど(略)特に、学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要との指摘がある(「学習・指導の改善充実や教育環境の充実等」下線部は佐藤・左近)。

21世紀型の、新たな時代・価値観に対応した資質・能力育成をめざす次期学習指導要領の構造化の中で、とりわけ重視されていることは何か。私見によれば「習得・活用・探究」の過程・伝統文化の尊重と継承等(教育基本法・学校教育法他)を踏まえた、いわゆる「論理性を踏まえた創造性(新たな価値観や生き方の創造や提案、洞察力や批評性)」、「質的に深い(人間的本質的)な学び、への指向性である。さらにこうしたいわゆる「深い人間的な学び(創造性、批評性)」を的確に見取り評価する、メタ認知化していくためのパフォーマンス課題・評価(論述、議論や討論、提案。批評・鑑賞等)、ルーブリック開発の新たな課題がある。

(2) 国語科学習・学びの再構築、実践的な課題

これ等は解のない、複雑多様な価値観や情報の時代をたくましく生き抜くために不可欠な資質・能力(リジリエンスや自己制御、共感能力等の非認知的能力を含む)の育成に関する実践課題である。

国語科学習はこのような資質・能力、知的活動・言語能力等、全ての教科・領域・活動の基盤であり中核となる教科である。学習過程と振り返り(メタ認知化)における「主体的な学び」「学びに向かう力(人間性等)」はそれ等全てを貫くベースになっている。

そのため、論理的思考を踏まえた「創造的・批評的な学び」、学び自体をメタ認知化、評価(批評)できる学習、全員に保証すべき基礎・基本(習得)・他者と協働的・対話的に関わるためのコミュニケーション能力の再考、自己の在り方生き方に関わる価値観を形成する「思考・判断・表現力等」の育成(活用)、そして学びの「質的評価観」の系統性の検証等の質的な再構築が明示されていると読むことができる(注1)。

2、情報リテラシー、新たな価値を創造する教育

(1) 多様なテキスト形式と伝記教材・実践的課題

第4次産業革命・グローバル化社会が進行する現代、多様で膨大な「情報」から必要な価値ある情報を選択し、知識や経験・感情(立場や専門性)との関連性から統合・構造化したり、既存の知識・技能等の構造転換等を通し、新たな意味を持つ「自分の考え」を形成する学びの方略・情報リテラシーを指導する必要がある。これは自分らしい「生き方」を主体的・対話的(協働的)に創造していくための教育課題一つである。

こうした教育的課題の突破口ともなるのが「自分の考え」を形成し「生き方」を創造する伝記教材の「テキスト形式」を生かした授業開発の視点である。また、現在、各教科等の言語活動で観察・実験・レポート作成、論述等の知識・技能の活用を図ったり、記録・要約・説明・論述といった学習活動に取り組んだりすることが強調されている。しかしこれ等と全教科・領域等のベースとなる国語科における記録・引用・要約・メモ・説明・レポート（論文）作成・論述・批評（評価）といった「多様なテキスト形式（習得型、活用・複合型）」との関係性が極めて不明瞭である。

教材の本質に即した作品形式・構成・ジャンル（多様なテキスト形式）の位置づけと説明は何をもたらずか。簡潔に述べると、①国語科学習の本質的な学びの意義と言語能力（言語活動）の系統性（報告・鑑賞・批評、随筆、詩歌等）、②他教科等での学びへの教科横断性（汎用性）等の明確化、③教材が変わっても既習の「テキスト形式」での学びを活かし他教材・領域、情報形式等の解釈・批評、活用に活かせる、④習得型の基礎・基本のテキスト形式（構成）と活用・複合型テキストの関連性の整理で教室での学びを実生活や現代的情報リテラシーへの対応等が可能となる（注1）。

(2) 「テキスト形式」解明からの伝記教材授業開発

伝記は小学校中学年以降の児童生徒が喜んで読む「テキスト形式」の一つであり、現行の学習指導要領の小学校5・6年生の「言語活動例」でも「伝記を読み、自分の生き方について考える」という項目が明示されこれまでの各社で教材化されてきている。

小中学校の国語科教材として「マザー・テレサ」「宮沢賢治」「田中正造」「緒方洪庵」「手塚治虫」「伊能忠敬」「金子みすゞ」等を取り上げた伝記教材が数多くあった。しかしこれらは伝記の読み方や意義、テキスト形式論、紹介や批評の方法（習得・活用・探究）についての系統的な位置付けや評価観から提案・検証されてきたとは言えないのが現状である。

伝記教材を活用することで、偉大な業績を残し人類の未来に貢献した人物だけでなく、身近な家族や無名の人物等の生き方の中に、「人生の苦難に、勇気と知恵をもってどう向き合ったか」「人生の転機にいかにか決断して、自分の人生を切り開いていったか」等を、自分の立場から主体的・批評的（対話的）に読み解く方法を学び、こうした人々の生き方や判断・行動について「自分の考え」を形成し、今後の自らの生き方の創造と関連させて指導していくことが、国語科の重要な学びであり、こうした観点からの新たな伝記教材の教材開発、授業・評価開発が求められている（注2）。

3、「テキスト形式」を生かした授業開発

(1) 伝記教材の「テキスト形式」の特徴とは

伝記（教材）というテキストは、事実をある立場から記した記録・論証の文体としての論理的な文章と、筆者独自の感性や認識による語りや描写としての文学的文章の2つの「テキスト形式」を併せもった「活用・複合（探究）型のテキスト」と言うことができる。

いわゆる伝記（評伝・史伝・自伝等を含む）は記録者によって選択されたある特定の人物の生涯を、①出生から死までの記録、②生きた証・価値（歴史的文化的・国家的、時代・制度的）の論述、③時系列や幾つかな特徴的なエピソードの選択・構成、解釈（意味付け）で記述、④選択された人物の業績や人柄・人間性等を記録・論証するもの（筆者による今日的な意義の提案。論証）とみることができる（注1～3）。⑤文体・構成の特徴は記録の文体としての論理的な形式・構成をもち業績や人柄・人間性等についての「筆者の発見と認識、主張（メッセージ）」が独自の文体で語られる（構成・語り・描写・エピソード選択と記述、象徴的なイメージの活用、読者意識からの工夫と配慮等）。

(2) 「テキスト形式」を生かした伝記教材の学び方

伝記という「テキスト形式」特有の学び方として、本研究では以下の10のポイントとして整理した。

- ①人物が生きた時代背景を知る（時代状況と価値観・生き方）。
- ②筆者の主張・メッセージを読み取る（論旨の理解から構成へ）。
- ③筆者の主張・メッセージの背景にある「時代的な価値観・常識的な考え方」を理解する（人物の個性、行動と生き方）。
- ④人物の設定を読み取る（出生と死、職業・生涯…）。
- ⑤選ばれた「エピソードの数と内容」を読み取る。
- ⑥選ばれた「表や図、写真等の資料」を読み取る。
- ⑦自分の立場や興味・関心から「自分の考え」をもつ。
- ⑧自分で選んだ人物について、伝記の「テキスト形式」を生かして論理的に構成する（歴史的、身近な人物…）。
- ⑨発表・交流でさらに「自分の考え」を形成・深め、生き方・物の見方や考え方に生かす（対話的・協働的）。
- ⑩伝記の「テキスト形式」の学び方をメタ評価する。

4、実践概要—オリジナル教材を例に一

(1) オリジナル伝記教材「杉原千畝」開発のポイント

本実践では、伝記本文のエピソードや表や図、写真等の資料が、小学校最終学年である6年生が自分の考えをもち自身の「生き方」を創造する際の「情報モデル」となるようにオリジナルの伝記教材を開発した。

取り上げたのは杉原千畝である。杉原は元外交官であり、第二次世界大戦中リトアニアの首都カナウスに日本領事館を開設、領事代理として当時の外務省の訓令に反し日本への通過ビザを発給し、およそ六千人にもなる避難民を救った人物である。近年、杉原の偉大なヒューマニストの一面だけでなく、人々に平和と秩序をもたらすために活動した非常に優秀なインテリジェンス・オフィサーとしての一面も注目されている。

杉原千畝は名古屋市立平和小学校の前身である古渡

尋常小学校の卒業生であり児童にとって身近な偉人である。しかし、何よりも国家の意向に逆らえない公的な立場、当時の時代常識下で杉原は後年手記に「苦慮、煩悶のあげく、わたしはついに人道博愛精神第一という結論を得た」(注4)と書き残したように、「人命の重さを尊重する、という現代でいう当たり前の人権感覚をもち、決断・行動した。

杉原が「僕でなくても、だれかその場にいたら必ず同じことをやるだろう」(注5)と語っていること、四男の杉原伸生氏が「父は物静かで儉約家の、ごく普通の人だった」(注6)と述べていることから、杉原が児童達の身近にいる人と同じ普通の人間であること、普通の一人の人間がした決断と行動の偉大さ、尊さに気付かせられる優れた教材性をもつと考えた。

(2) 学習目標 (到達目標) 6項目

- ①本文や表や図、写真等の資料から人物設定・状況設定を正確に読み取ることができる。【習得1—基礎・基本—】
- ②エピソード選択・構成・内容から人物の生き方を正確に読み取ることができる。【習得2—基礎・基本—】
- ③当時の常識的な価値観からメッセージ(批評性)を読み取り、自分の考えを形成できる。【活用1—自分の考えの形成—】
- ④身近な人物や偉人等から人物を選び、生き方について情報を集めて論理的な文章(レポート)にまとめることができる。【活用2—立場・観点からの情報の構成—】
- ⑤選んだ人物の紹介をし合い、自分の生き方についてより深く考えることができる。【探究—学び合いと考えの深化・評価—】

(3) 教材・学習シート (資料1～8、一部のみ提示)

5、伝記教材の授業実践—習得から活用・探究へ—

(1) 習得—楽しくシンプルに資料の読み取り (2時間)

導入では資料1の学習シートを使用し、何故様々な人の生き方を知る必要があるのかと問い掛け、人物の生き方を知るためのステップ1からステップ5までの「学び方」を確認。その際、主要エピソードだけでなくその人物が生きた時代背景を知るための資料、年表、地図等、様々な観点から対象となる人物を見て生き方に迫るといふ伝記の「テキスト形式」について伝えた。

人物が本校の大先輩である杉原千畝であることを知った児童達からは喜びの声が挙がった。平和小学校は小学3年生からの「総合的な学習の時間」で「ちうねタイム」を設定、杉原の生き方についての学習だけでなく自己理解や他者理解の学習活動を行っている。また平和小学校には杉原が名誉回復をした2000年、校庭に「ちうねチャイム」が作られ入学する時や卒業する時、児童達が良い行いをした時や良い事があった時には「ちうねチャイム」を鳴らしている。

児童達に身近な偉人である杉原千畝であるが、時代背景・状況の複雑さや難しさもあり、杉原の「生き方」を考える学習は6年生まで行われていなかった。杉原の「生き方」を正しく理解して卒業し、今後の自身の「生き方」につなげてほしいというのは教師だけでなく

児童・保護者の方にとっても切実な思いであった。

次に、杉原千畝が生きた時代背景の特質を「太平洋戦争」「ナチス党とユダヤ人の迫害」「強制収容所」という3つのキーワードから押さえた(資料2)。

伝記という「テキスト形式」を生かす上でポイントとなるのが、児童達の発達段階に応じた詳しさを考慮しつつ、時代背景を効率よく確認し時代の常識的なものの見方・考え方を理解させることである。人物が時代の価値観とどう向き合っているか、思考・判断し生きてきたのかという点を児童自身が批評・評価することができ、こそ、より自分らしく、信念と情熱をもって生きることの大切さにも気付かせることができる。

その後、年表から杉原の生涯を辿った(資料3)。杉原の一生と対応させ日本と世界の出来事を載せ、年表から気付いたことを話し合わせた。児童達からは「千畝さんが生まれた年である1900年以降、日本はずっと戦争をしていたんだ」「なぜ47歳で外務省を辞めたんだろう」「たくさん人の命を助けたのに、それが認められたのは69歳になってからだったんだ」等、根拠の数字や名前を明示し様々な感想や意見・疑問が出された。

地図や画像を活用し、杉原の足跡を確認した(資料4)。移動手段として航空機がなかった時代に、杉原が日本、中国、リトアニア、ロシアへと長距離を移動していたことを知り驚く児童が多かった。また、世界地図におけるリトアニアの場所については、国名は知っているものの、地図上のどこにあるかは知らない児童ばかりであった。年表や地図、写真等の資料と児童達と杉原とのつながりが確認できるものを多く取り入れ、杉原を身近な存在として認識できるよう配慮した。

(2) 習得2—エピソード・人間性の読み取り (2時間)

杉原に関する注目エピソードを選択し読み取らせた(資料5)。選んだエピソードは3つである。「エピソード1」は、税務官であった父親の転勤に伴って岐阜・三重・愛知と移り住み育ってきた一少年が「杉原千畝」になるまでのエピソード、「エピソード2」は優秀なインテリジェンス・オフィサーとして活躍した杉原のエピソード、メインの「エピソード3」では、杉原の運命の決断・行動のエピソードを取り上げた。

それぞれのエピソードは資料や年表、地図と併せて読み取った情報をシートの「プロフィール」にキーワードやキーセンテンスで記入させ、シンプルに確認した(資料6)。小学校高学年の児童はプロフィールを書くことが大好きである。プロフィールという型を使った情報整理(構成・判断)にとっても喜んで取り組み、資料を読み直しながらまとめることができていた。

(3) 活用1—「自分の考え」をまとめる (1時間)

国家・外務省の方針と一外交官である杉原の判断と行動をどう関連付けて解釈し、決断の価値に気付いて自分の考えを形成させることができるかが、伝記教材の学習での最大のポイントとなる(「エピソード3」)。

そこで、資料7の学習シートを活用し杉原の人柄を自分の感性でイメージさせた後で「杉原の偉大さはどこにあるか」「杉原の『生き方』を一言で言うとどのような『生き方』なのか」について「エピソード3」を根拠に考えをもたせた。杉原の「生き方」については「自分を犠牲にしても人の命を大切に生きる生き方」「どんなことにも立ち向かい、真っ直ぐに前を向く生き方」「今自分が何をすべきかを考え、行動にうつす生き方」等、様々な考えが出された。

その後、①自分が変わったこと、また変えていきたいと考えていることやこれからこうしていきたいと考えていること、②情報の読み解き方、まとめ方等、学習を通して学んだことについて記述させ、交流させた。

(4) 活用2—人物を選び情報をまとめる (3時間)

活用学習では習得で学んだ伝記教材の「テキスト形式」を活用し児童達の興味・関心を生かした人物の「生き方・決断」を紹介する活動を行った。杉原をモデルとした習得学習と並行し、興味をもった人物の「生き方」や「決断・行動」について情報を収集するよう予め伝えておいた。児童達は伝記を読んだりインターネットを使って調べたり、身近な大人・家族、先生等にインタビューをしたりして情報を収集した。

集めた情報の中から必要な情報を選択・判断し、習得学習で使用したものと同じ形式のプロフィールにまとめさせた。その後、その人物の「生き方」「決断・行動」の偉大さや、自分の「生き方」に生かしたいと思うこと等、その人物の「生き方」と児童が持っている知識や経験や感情を統合して「自分の考え」を形成させた。児童達が選んだ人物は社会科の歴史で学んだ人物だけでなく、「広岡浅子」「安藤百福」「五代友厚」「真田幸村」「小泉八雲」等、実に多様であった。祖父を対象としてインタビューで情報を集めた児童もいた。

次に、資料8の学習シートを使い「はじめ」「なか1」(エピソード1)「なか2」(エピソード2)「まとめ」の構成で発表原稿を書かせた。この学習は学んできた伝記の「テキスト形式」を生かし自分が選んだ人物の「生き方」や「決断・行動」を論理的に構成し書くことをねらいとしている。なお、タイトルの付け方には2通りあり、一つ目は自分が一番伝えたいことのキーワードをタイトルに付ける型、二つ目は聞き手の興味を惹くように考えてタイトルを付ける型である。サブタイトルは、「〇〇の生き方」か「〇〇の決断・行動」として選んだ人物名を入れさせるよう指導した。

また、「なか」のエピソードの紹介では収集した様々なエピソードの中で、「まとめ」の人物に対する評価・判断につながるようなエピソードを二つ選ばせた。その際、習得学習におけるエピソードの読み取りで学習した、事物の名前や数字を入れて書くこと、会話や手紙等を効果的に引用して書くことを確認した。

最後に、参考にした本やホームページ等を記述、出

典・引用を明らかにすることの重要性を理解させた。

(5) 探究—自分の「生き方」について考える (3時間)

自分が興味をもった人物の「生き方」「決断」について発表し、着眼点や選ばれたエピソード、資料、まとめ(考察)の良さに気づき、関わり合う学習を行った。関わり合い、批評し合うための観点をすべての子どもが身に付けられるよう「感想・意見をもつための10ポイント」(メタ認知化のステップ)を確認した。

- ①すごいなあと思ったところ…他者への敬意、情報の発見
- ②初めて知ったことや、驚いたところ…主体性・学びの意欲
- ③分からない、もっと知りたいと思ったところ…課題・質問
- ④人物の人柄がよく分かるエピソード…描写・語りの価値
- ⑤人物を取り巻く人々や時代状況がよく分かるエピソード
- ⑥会話や手紙、地図や写真等の資料が効果的に使われているか
- ⑦発表した友達らしさが出ていると感じたこと…他者の本質
- ⑧紹介された人物の生き方についての考え…情報リテラシー
- ⑨誰かの生き方に似ていると思った点や全く違うと感じた点
- ⑩発表を聞き、自分の「生き方」に生かせようとするところ

探究学習では児童達が既にもっている考えの構造・思考の枠組みを転換・深化することを通して、さらに自分らしい考えを形成することが重要である。様々な苦難を乗り越え、決断・行動を繰り返しながら生きた人生の先輩の軌跡を知り、12歳の児童達なりに自分らしい「生き方」とはどういうものなのか、これからどうしていきたいかを考えるきっかけとなった。

最後に、単元全体を通した「振り返り学習」を行った。伝記教材を読むことの意義や楽しさの視点、新しく学んだことや今後の生き方・考え方・学びに行かせる汎用性・メタ認知化等の視点から振り返らせた。

6、よりよい「生き方」を創造することへ……

これからの学校教育で重要となるのは全教科・領域や活動のベースに「学びに向かう力(主体性)、人間性等(深い学び)」があるということである。学習活動を通してどのように社会や世界と関わり、どう主体的によりよい人生を送るか等、児童の「生き方」や価値観の更新に直結する「深い人間的な学び」につなげること。活動ありきの学習ではなく、教科内容の本質的で原理的な魅力を引き出す「学び方・型」、伝記教材であれば対象となる人物の生き方と価値を読み取り、深い人間性や英知等に気付かせる「学び方・型」を習得させ、評価していかなければならない(注1・2)。

(1) 「主体的・深い学び」と学習システムの確立

今日的な課題である「主体的な」課題(問題)解決的な学び、「深い」探究的学びを実現させるためには、確かな「習得」から「活用」「探究」への学習システムを確立し、各学習段階における目標の到達度をメタ評価させながらステップアップしていく必要がある。特に、全員が本質的で汎用性の高い「教科・情報の学び方・型(方略)」が分かり、「多様なテキスト形式」や情報内容を正確に読み取る「習得」段階、そして一人一人が明確に「自分の考え」をもち、自分の立場・関

資料1 伝記教材を読むことの意義・「学び方（型）」に気付かせる学習シート（導入・基礎学習）

※資料1～8は全て自作の教材・学習シート（作成・左近妙子）

☆ なぜ、さまざまな人物の生き方を知る必要があるのかな？

偉人、家族や親せきといった身の回りの人などの、さまざまな人物の生き方を知ることは、一度きりしかない大切な人生で、自分らしく生きるとはどういうことかといった、生き方を考えるきっかけになります。そして、人生ではだれでも挫折した経験があることや、周りの人々に支えられて生きていくことのありがたさに気づくことができます。

さまざまな人物の生き方を知り、自分らしい生き方を考えよう

六年 名前

☆ ステップ1 人物の生き方を知る「学び方」を知ろう。

人物の生き方を知るには、様々な観点から対象となる人物を見て、分せきすることが必要です。

いつの時代の人かな？

その時代に、どんなことがあったのかな？

どこの人かな？

その人物が行った場所はどこかな？

どんな子ども時代を過ごしたのかな？

年表

エピソード

人物が生きた時代の資料

地図

※杉原千畝の肖像写真（正面）

生きたい人物

どんなころを過ごしていたのかな？

その人物のまわりには、どんな人がいたのかな？

どんな力や技術をもっていったのかな？

世のため、人のために、どんな行いや決断をしたのかな？

その人物の行いや決断は、どんなところに価値があるのかな？

☆ 人物の生き方を知り、自分らしい生き方を考える学習の進め方を確認しよう。

ステップ1 人物の生き方を知るための「学び方」を知ろう。

人物が生きた時代を知り、その時代の当たり前のものの見方・考え方や、人物がおかれていた状況を読み取る。

エピソードから、人物の人がらや生きざまを読み取る。

ステップ2 人物の生き方（決断）について、自分の考えや意見をもとう。

他の人物についての生き方に興味をもち、伝記を読んだり、調べたりしよう。

☆ 杉原千畝の生き方を知ろう。

この学習では、名古屋市立平和小学校の前身である、古渡尋常小学校を卒業した、杉原千畝の生き方について学びましょう。

第二次世界大戦中、当時の国の命令にそむき、死に直面していた六千人の命を救った杉原千畝は、そのとき、どのような状況におかれていたのでしょうか。また、それまでどのような人生を送ってきた人なののでしょうか。杉原千畝の生き方を知ることを通して、自分らしい生き方を考えましょう。

※杉原千畝肖像写真（横顔）

資料2 杉原千畝の生きた時代背景・価値観、生き方・生と死をめぐる状況等を理解するための資料

☆ ステップ2

杉原千畝が生きた時代を知り、その時代の当たり前のものの見方・考え方や、千畝がおかれていた状況を読み取る。

さまざまな人物の生き方を知り、自分らしい生き方を考えよう

（太平洋戦争）

日本は一九四〇年、石油などの資源を得るために、東南アジアに軍隊を進めました。また、ドイツやアメリカなどと日独伊三国同盟を結び、アジアの地域を支配しようとしていました。このため、イギリスやアメリカなどと、激しく対立するようになりました。

日本は一九四一年、ハワイのアメリカ軍港やマレー半島のイギリス軍を攻撃しました。こうして、アメリカやイギリスなどの国々と、東南アジアや太平洋を戦場にしていって戦う太平洋戦争になりました。日本は初めこそ勝利しましたが、アメリカ軍の反撃により、敗戦を重ねていきました。一九四五年八月六日には広島、九日には長崎に、アメリカ軍が原子爆弾を落としました。八月一日、日本はついに降伏し、アジア・太平洋の各地を戦場とした戦争がようやく終わりました。

※アジアの町を占領する日本軍の写真

アジア各地を占領する日本軍

※ハワイの真珠湾攻撃の写真

ハワイの真珠湾で日本軍の攻撃を受けるアメリカの戦艦

※原子爆弾投下後の広島の写真（中央に原爆ドーム）

原子爆弾が投下された後の広島の様子・中央右は原爆ドーム

（強制収容所）

※アウシュビッツの強制収容所の写真

アウシュビッツの強制収容所

※強制収容所に移送される人々の写真（駅にいる人々）

強制収容所に移送される人々

最も多くユダヤ人が住んでいた国、ポーランドの六カ所に、強制収容所が作られました。ナチスは、収容所で生活し、働けるようにするという理由で、多くのユダヤ人を移送しました。収容所に着くと、多くの人は「ガス室」と言われる場所に連れて行かれ、殺されてしまいました。生き残った人は、強制労働収容所に移されました。そこでは、ひどい環境にたえきれず、ほとんどの人が数カ月うちに亡くなりました。病気で倒れた人々はガス室へ送られました。

※ナチスによって連行されるユダヤ人の写真（中央に子ども）

ナチスによって強制収容所へ連行されるユダヤ人

（ナチス党とユダヤ人の迫害）

一九三三年、ドイツでは、アドルフ・ヒトラーがリーダーとなつたナチス党が、選挙によって政権につきました。第一次世界大戦で負けたドイツは、経済的・社会的に混乱してしまいました。それに拍車をかけるように、一九二九年の世界大恐慌により失業者が続出し、人々の不満は頂点に達していました。

ナチス党は、「ユダヤ人がすべての問題の原因である」という考えをもっていました。ナチスにとってユダヤ人の迫害は、ドイツ人が生き残るための戦いと考えられていました。ヨーロッパの各地でも、ナチスの支配がはじまると、ユダヤ人は「ゲットー」と呼ばれる地域に集められました。ゲットーのまわりには壁がつくられ、中でユダヤ人はひどい生活を強いられました。

資料3 杉原千畝の生涯と世界・社会との関わりを知る年表 —今、世界はどう動いているのか?—

年	杉原千畝の一生	日本と世界のできごと
一九〇〇	0 一月一日、岐阜県で生まれる。	一九〇四 日露戦争が始まる。
一九一二	12 名古屋市立古渡尋常小学校（現平和小学校）を卒業する。 愛知県立第五中学校（現瑞陵高校）に入学する。	一九一四 第一次世界大戦が始まる。
一九一七	18 早稲田大学高等師範部英語科に入学する。	一九一八 第一次世界大戦が終わる。 米騒動が起こる。
一九一九	19 外務省留学試験に合格し、ロシア語を学ぶため、中国のハルビンへ行く。	一九二二 関東大震災が起こる。
一九二二	21 母・やつがなくなる。	一九三一 満州事変が起こる。
一九三二	32 満州国外交部につとめる。	一九三四 ヒトラーがドイツの総統になる。
一九三三	33 北満鉄道を買い取るため、ソ連との交渉をはじめめる。	
一九三六	36 菊池幸子と結婚する。	
一九三七	37 長男・弘樹が生まれる。	一九三七 日中戦争が始まる。
一九三八	38 次男・千暁が生まれる。	一九三八 ドイツで約三万人のユダヤ人が強制収容所へ入れられる。
一九三九	39 リトアニアのカナウス日本領事館で、領事代理になる。	一九三九 第二次世界大戦が始まる。
一九四〇	40 七月、ナチスから逃れてきた難民に、ピザの発行を始める。	
一九四一	41 九月、チェコの日本総領事館へ赴任する。	一九四一 太平洋戦争が始まる。
一九四二	42 三月、ドイツ・東プロイセン州の日本総領事館へ赴任する。	一九四二 アウシュビッツ収容所で、ユダヤ人の大量虐殺が始まる。
一九四五	45 一月、ルーマニア日本公使館で通訳官になる。	一九四五 ドイツが降伏する。
一九四四	44 ソ連の収容所に入れられる。	一九四五 日本が降伏し、第二次世界大戦が終わる。
一九四七	47 外務省をやめる。	一九四八 イスラエルが建国される。
一九四九	49 三男・晴生がなくなる。	
一九五〇	50 四男・伸生が生まれる。	一九六一 ベトナム戦争始まる。
一九五一	51 父・好水がなくなる。	一九六四 オリンピック東京大会が開かれる。
一九六〇	60 貿易会社のモスクワ事務所所長になる。	
一九六九	69 イスラエルで宗教大臣と再会し、勲章を受ける。	
一九八五	85 イスラエル政府から「諸国民の中の正義の人賞」をおくられる。	
一九八六	86 七月三十一日、神奈川県鎌倉市でなくなる。	
一九九一	91 リトアニアに「スギハラ通り」ができる。	
二〇〇〇	00 岐阜県八百津市に「杉原千畝記念館」が建てられる。	
二〇一六	16 名古屋市長立平和小学校に「ちうねチャイム」ができる。	

「人道の道」ができる。

※ ハリトアニアの地図
リトアニアのスギハラ通り

（杉原千畝の一生）

日本と世界のできごと

資料4 杉原千畝の足跡を知るための地図と写真等 —リトアニアってどこ？ データから読み取る—

※ヨーロッパの地図
(リトアニア共和国を中心に表示)

※ロシアを中心にした世界地図
(シベリア鉄道を表示)

※当時のカナウス日本領事館の写真

当時のカナウス日本領事館

※森に囲まれたリトアニアの首都であるカナウスの写真
(一九三〇年当時)

一九三〇年代のリトアニアの首都、カナウスの様子

千畝の心を後世に伝えるために作られた平和小学校のチャイム

「千畝」の名の由来となったとも言われている岐阜県の棚田

※杉原千畝が使われた切手

リトアニアの切手になった千畝

（杉原千畝の足跡）

資料5 杉原千畝の人柄や生き方を知る三つのエピソード ー描写・記録、語り・構成等と生き方ー

さまざまな人物の生き方を知り、自分らしい生き方を考えよう

ステップ3 エピソードから杉原千畝の人からや生きざまを読み取る。

注目エピソード1 語学力を生かした道に進みたい！

杉原千畝は、父親の仕事の都合で、三度も小学校を転校しましたが、成績がとても優秀で、名古屋市から表彰されたこともあるほどです。愛知県立第五中学校（現・瑞陵高校）に進んだ千畝は、勉強の中でも、英語が一番得意でした。

※杉原千畝が尋常小学校五年のときに成績優秀のため名古屋市から表彰された賞状の写真

「杉原、発音がとてもきれいだぞ！」と、先生にほめられた千畝は、将来、得意の語学を生かして、中学校の英語の先生になろうと決めていました。ところが千畝の父親は、千畝が医者になることを希望し、医者になるための専門学校の受験手続きをしようとした。しかし、語学力を生かした道に進みたいという夢を簡単にあきらめきれない千畝は、「頑張って試験を受けなければ、不合格だ」ということであれば、お父さんも納得するに違いない。」と考へて、試験当日、答案用紙に名前だけを書いて帰ってきたのです。

結果は、もちろん不合格でした。すると父親は、千畝の予想外の行動に出ました。息子が成績優秀であることを信じていたので、不合格という結果に納得できず、学校に問い合わせをしてみました。そこで、千畝が白紙の答案用紙を提出したことが分かり、父親はとて怒りました。結局千畝は、語学力を生かした仕事につくという夢を実現させるために、家を出て東京に行き、早稲田大学に通い始めました。必死で勉強や生活費をすべて自分でかせがなければいけませんでしたが、千畝はアルバイトをしながら、学費や生活費をすべて自分でかせがなければいけませんでしたが、その後、早稲田大学在学中に、千畝は外務省の留学生の試験に合格し、中国のハルビンへ行つてロシア語を学ぶことで、活躍の場を世界に広げることになったのです。

注目エピソード2 交渉の達人、杉原千畝

一九三二年六月、千畝は満州国の外務省にあたる、外交部に勤めることになりました。満州国は、日本の関東軍が、中国の満州に建国した国です。このときの関東軍は、力でもって相手に自分の言うことをさせざるを得ない態度であったと、千畝はのちに外務省への報告書に書いています。そんな満州国の外交部に千畝が移った理由は、そこにソ連問題を専門とする外交官として、大変重要な仕事があることに気付いたからです。

満州国には、中国とソ連が共同で経営していた北滿鐵道がありました。これからこの鐵道をどうしていくかについて、ソ連と真剣に話し合わなければならぬ日が続いていました。その話し合いの場は、ソ連の文化や経済状況に詳しい千畝にとつて、それまで自分がたくわえてきた知識や経験を生かす、大舞台だと考えたのです。

一九三三年五月、ソ連は、北滿鐵道に関するソ連の権利を、売りわたしたいと提案してきました。いよいよ、千畝の出番です。千畝は、満州国の代表団の一員として交渉に参加しました。交渉は開始してまもなく、大きな問題につきあたりました。ソ連は、売りわたす金額として、当時の日本円にしておよそ六億二五〇〇万円を要求してきたのです。代表団のメンバーが、ソ連の示した金額に驚き、千畝は全く驚くことはありませんでした。なぜなら、ソ連の交渉の仕方をよく知っていたからです。最初に高い要求をつきつけるという交渉の始め方は、ソ連側がよく使う作戦でした。

千畝は、それまでに信頼関係を築いてきたロシア人たちに協力してもらい、北滿鐵道の調査を始めました。すると、古くなつていて線路が修理されていないことや、ソ連が自分の国に、たくさんの貨車をもつていつてしまったことなどが分かりました。千畝が交渉の場で、調査結果を明らかにすると、ソ連側は青くなり、会議室でロシア人同士が熱く話し合いをしていると思つたところ、ロシア人対千畝だった、というエピソードも残っています。

一九三五年三月、ソ連が満州国に鐵道を売る取り決めがまとまりました。金額は一億四〇〇〇万円、ソ連が最初に提示していた金額の、約五分の一まで引き下げました。北滿鐵道の交渉が成功し、だれもが千畝の満州国でのがやかしい未来が開けると思っていました。しかし、千畝は軍の下働きをしたくないという理由で、あっさり満州国外交部をやめて、日本に戻ってきたのです。

注目エピソード3 杉原千畝の決断

一九三九年、リトアニアの首都カナウスに新しく日本領事館が置かれ、千畝が領事代理に任命されました。この年の九月一日、ドイツ軍がポーランドに攻め込み、三日にはフランス、イギリスがポーランドを助けるために、ドイツに宣戦布告をしました。第二次世界大戦の始まりです。ドイツ軍は、早くも九月二十七日にはポーランドの首都ワルシャワを攻め落とし、ソ連もポーランドに侵攻を開始し、翌年リトアニアを占領しました。

※領事館の前でビザの発給を待つ人々の写真

ビザの発給を待つ人々

「そこでわれわれは、ポーランドからリトアニアに逃げてきました。でも、こゝもすぐ戦場になるでしょう。」
「もう西への逃げ道はありません。ですから、ソ連を経由して日本に入り、第三国に逃げるしかありません。」
「日本がビザを発給すれば、ソ連も出すと言っています。ですから、私たちの希望はあなただけなのです。ミスター・センボ。通過ビザを発給してください。どうか、ビザをください。」
千畝が席を立てて窓の外をのぞくと、いせんとして何百人もの人が、音も立てずに静かに待っていて、折るように千畝を見つめていました。
千畝は、東京の外務省に許可を求める電報を打ちましたが、その回答は、ビザの発給を認めないというものでした。
そのころ日本はドイツに味方しており、ドイツ、イタリアと軍面で互いに援助し合うことを約束する「日独伊三国同盟」を結ぼうとしていました。ユダヤ人を助けることは、ドイツにさからうことになりません。

千畝はあきらめきれず、三度も電報を打ちましたが、三度とも回答は同じでした。千畝は悩み、迷い、苦しんだ末、決断しました。千畝の方針がどうであろうと、わたしは人間として、この人々を見放すことはできない。」
千畝は早速、ビザを書く仕事を始めました。ビザを書くには一人一人に会って、その人の氏名、国籍、住所、年齢、最終目的の国などを聞かなくてはなりません。いくら頑張っても、一時間に十人分をこなすのがやっとです。ところが外には、三千人を超す人々が待ち続けています。千畝は、一日に二百枚のビザを書くことを目標にして、ビザを書き続けました。

そんな時、外務省から、すぐにカナウスの領事館を閉鎖して、ドイツの大使館に移れという指令が届きました。それでも千畝は、机に向かい続けました。腕が上がり、睡眠不足で頭がもうろうとしていきましたが、カナウスを去る最後のときまで、千畝はビザを書き続けました。千畝は一九四七年に日本に引き上げました。外務省に行つた千畝は、すぐさま、退職することを勧められました。理由は、千畝がカナウスで日本からの命令に背いたことにありました。千畝は、人の命を助けたという自分の決断を後悔していませんでした。いさぎよく退職しました。それから十数年後、千畝に命を助けられた六千人の人々のうちの一人が、苦勞して千畝を見つけて出すことができたとき、当時の千畝の決断と人道的な行為が、ようやく多くの人に認められることとなったのです。

※杉原千畝が発給したビザの写真
杉原千畝のサイン
あり

千畝が発給したビザ

※ヨーロッパの中のリトアニアの場所を示す地図

心・課題意識から発信・交流・学び合いをする対話的・協働的な「活用」「探究」段階の充実が必要である。

(2) 「自分の考え」(解釈・言語化、方略)の形成

「自分の考え」に各段階でのレベルを想定した。

- ①「習得1」既習の学習や経験から考えをもつ。
- ②「習得2」文章や地図、年表、画像を読み取り考えをもつ。
- ③「活用1」自分の立場から情報に対する考えをもつ。
- ④「活用2」異なる立場の情報に対する自分の考えをもつ。
- ⑤「探究」学習を振り返り、自分らしい「生き方」や今後の課題等について自分の考えをもつ。

このように情報の論理的な構成・発信、交流・学び合いモデルの「習得」から「活用」「探究」へのステップで児童達自身がどのような考えを、どうもてばよいのかを目に見える形で示していく必要がある。

(3) 言語・非言語情報の関係を読み解く

伝記の「テキスト形式」において、年表や地図等の非言語情報も言語情報と同様重要である。言語と非言語情報(データ・グラフ・図・画像・年表等)との関係を正確に読み解くこと、そして論理的で説得力があり記録・報告・プレゼンテーション等に非言語情報選択の意図や効果を明確にして活用・探究(創造・評価、改善)していく力を育てる必要がある。

(4) 学びの質と深まりを「メタ認知」(ルーブリック)

多様な文脈に応じた「テキスト形式」による学びの横断的汎用性を重視するために、到達目標に対応した振り返りの新たな視点の再構築が必要となる。本実践では評価レベル(ルーブリック)を以下の6項目設定した。これらの項目を活用し児童が学んだことを新たな発想や認識・価値観の形成に生かす方法を明示した。

- ①〈意欲・主体性レベル〉伝記教材で学ぶことの楽しさを知る。
- ②〈知識・技能・理解レベル〉伝記教材の「テキスト形式」の学び方が分かる。
- ③〈思考・判断・表現レベル〉自分の立場や関心から「自分の考え」をもつ。
- ④〈表現・判断・構成、発信レベル〉選択した人物の生きた時代背景・生き方・価値観を伝える。
- ⑤〈対話的・協働的、交流レベル〉他者との発表交流によりさらに自分の考えを形成し、自分の生き方物の見方や考え方を深化させる。
- ⑥〈メタ認知化・主体性、深い学びレベル〉学んだ内容や方法、発見等を自己の生き方や価値観、学習・生活、読書、人間関係等に生かす。

7. 授業力・教師力とカリキュラム・マネジメント—資質・能力と「多様なテキスト形式」の解明—

21世紀型の新しい学びや資質・能力に対応すべき多様な教材ジャンル(テキスト形式・表現)が学習指導要領で示され教材化されて久しい。一方、授業実践での混乱が多い要因として次の点が挙げられるだろう。

一つは、戦後以降根強く残る形式的な文章観による教材・指導観がある(文種別指導)。また、国語科教材研究論では依然として文学的文章と論理的文章の二大別が多く、両者の特性を併せもつ、また表や図やグラフ等、非言語情報を組み合わせたいわゆる「活用・複合(探究)型のテキスト形式」についての実践的研究、重要性への指摘も十分に行われていない。

二つ目。現行学習指導要領「解説」でも「多様なテキスト形式」についての言及が漠然としたものになっており(鑑賞・評論・批評の相違、随筆・詩歌・物語創作と評価観)、結果的に各社の教科書・手引きや指導書等でも指導方法や学びの系統性・汎用性、評価観等の記述が明らかではないことが挙げられる。

「多様なテキスト形式」を解明し授業実践に位置付けることは、文学的・論理的文章教材を系統的・汎用的に位置付け整理するという国語科授業改革につながる。さらに、各教科・道徳・ESD・情報教育(プログラミング教育)等の教育内容を踏まえた汎用的な視点で、学校・学年・教科の目標達成に必要な教育内容の組織的重点化(カリキュラム・マネジメント)を具体化するためにも重要な視点である(注1・2)。

本稿は第4次産業革命・グローバル化の複雑な現代をたくましく生き抜く資質・能力をいかに育成するか、「自分の考え」を形成し主体的な「生き方」を創造するための教育の一つとして、伝記教材の「テキスト形式」を生かした教材開発と授業実践について論じた。紙面の制約上、児童達が記述した学習シートの分析や考察、具体的な学びの過程や個々の学びの変容、開発した教材や学習シート(一部)の細部・詳細と考察等について十分論じられなかった。別稿を期したい。(1~3・7は佐藤、4~6は左近による執筆である)

〈注記・主な参考文献(一部)〉

- 1、佐藤洋一「これからの学び・教育の何を、どう創るのか」『21世紀型教育研究—新しい学びを創る(創刊号)—(21世紀型教育研究会編著2016年5月)、同・森和久・有田弘樹「国語科におけるアクティブ・ラーニングの開発と課題」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 第1号』(2016年3月)、佐藤編著「国語科『習得・活用型学力』開発と授業モデル4 伝記・ノンフィクション編(明治図書2011年)、同「批評的・創造的な学びの授業開発—テキスト形式に着目した21世紀型学習—」(第127回全国大学国語教育学会2014年11月)等。
- 2、左近妙子「伝記教材の授業・評価の開発—司馬遼太郎「洪庵のたいまつ」を例に—」(第22回日本言語技術教育学会・名古屋大会発表資料、2013年3月)、同「コミュニケーション能力を育てる国語科・評価の開発」(「国文学 言語と文芸の会2012年度大会」2012年12月)等。
- 3、モミリアーノ『伝記文学の誕生』(東海大学出版会1982年)、斎藤孝『自伝を読む』(筑摩書房2014年)、『国語科重要用語事典』(明治図書2015年)等(詳細は略)。
- 4、杉原千畝が83歳頃から書きはじめた「千畝手記」の全文が掲載(杉原幸子監修・渡辺勝正編著『決断』大正出版1996年)。
- 5、1977年8月4日国際交易モスクワ支店にて、フジテレビ・モスクワ支店長が杉原千畝に行ったインタビューより引用。
- 6、2016年7月12日(火)に名古屋市立平和小学校に杉原千畝氏四男の杉原伸生氏が来校した折に、父千畝について語った言葉より引用。白石仁章『杉原千畝：情報に賭けた外交官』(新潮社2015年)、杉原誠四郎『杉原千畝と日本の外務省』(大正出版1999年)、手嶋龍一『スギハラ・サバイバル』(新潮社2012年)等(詳細は略)。

(2016年9月21日受理)